





学位審査結果報告書

学位申請者名	藤井 至	学生番号		専攻名	観光学専攻
論文題目	都市農村交流によるコミュニティの変容ーソーシャル・キャピタルからの接近ー				
論文審査及び最終試験の成績（表記は合格又は不合格とする。）				合格	
審査委員会					
主査 藤田 武弘  委員 大浦 由美 					
委員 櫻井 清一  委員 					
[論文審査の結果の要旨]					
<p>本論文は、人口減少社会に突入したわが国の都市、農村が直面する諸課題の解決に糸口を与える概念としての「Social Capital（以下 SC）」に着目し、タイプの異なる都市農村交流の取り組みを手掛かりに、それらがホスト側（農村住民、農家）・ゲスト側（都市住民、非農家）それぞれに関係するコミュニティを如何に変容させたのかについて、ステークホルダーの意識構造変化や SC 蓄積の様相を分析・考察することにより、都市農村交流が有する社会的意義を指摘したものである。</p> <p>近年、わが国においては、農山村地域問題の解決に立ち向かう概念として「関係人口（定住人口でも一過性の観光人口でもなく、地域や地域住民と多様に継続的な繋がりを持つ者）」を創出することの重要性が指摘されており、農村における体験交流型観光への参加を契機に継続的な都市農村交流へと至るリピーターの存在に注目が集まっていることから、交流の深度が SC の蓄積やコミュニティに与える影響を解明することは学術的・社会的にも意義が認められる。本論文は、それらの要請に応じて、多様な都市農村交流の取り組みを一回の活動時間の長短と地域（農業・住民・生活）との関わりの深さを指標にポジショニングを行い、岩手県奥州市で実施されている域学連携型「農村ワーキングホリデー（以下 WH）」（一回当たりの活動時間が長く地域との関わりが深いタイプ）と東京都練馬区で実施されている「農業体験農園」（一回当たりの活動時間は短い継続的に実施されることで地域との関わりも深いタイプ）を各々分析している。</p> <p>分析に先立って、著者は、本研究で対象とするコミュニティを、都市農村交流による変容という視点から、「①受入農家（ホスト）間のコミュニティ：Gemeinschaft 的な農村型・地縁型コミ</p>					

コミュニティを土台とするが、交流活動への参画を通じて一部が都市型・テーマ型コミュニティに
変容、②受入農家（ホスト）と参加者（ゲスト）によるコミュニティ、および③参加者（ゲスト）
間のコミュニティ：Gesellschaft 的な都市型・テーマ型コミュニティ」と定義したうえで、従来
の SC 研究の到達点と課題を次のように整理している。

第 1 章（SC 研究の現代的意義）では、従来の SC 研究を批判的に継承すべき点として、その構
成三要素とされる「ネットワーク、信頼、互酬性」の全てを総合的に捉えることが重要であり、
①地縁を基盤とするフォーマルなコミュニティにおいて結束力を育むことができる内向きの「結
合型（Bonding）SC」、②地域の枠組みを超えた“志縁”を基盤とするインフォーマルなコミュ
ニティにおいてネットワークの構築を志向する外向きの「橋渡し型（Bridging）SC」の双方を同
時に蓄積することが可能なコミュニティこそが望ましい姿であると指摘する。そして、地縁型コ
ミュニティを軸として外部人材を巻き込みつつテーマ型コミュニティ化を図ることで、「結合型
SC」の負の要素である“排他性”と「橋渡し型 SC」の負の要素である“繋がり希薄化”を同
時に解消することが可能となるが、その際に最も有力な取り組みが都市農村交流であるとする。
観光学研究（グリーンツーリズム論）の視点から、「関係人口」創出とコミュニティ再生との関係
を論じた研究は端緒的であり、かつ SC 研究に残された課題解決にも資することができることか
ら、論文としての高いオリジナリティを認めることができる。

例えば、域学連携型 WH によるコミュニティの変容（第 3 章）においては、域学連携の取組を
積み重ねる過程で、受入農家が自主組織を設立するなど当事者意識が醸成され始めている点を指
摘した上で、複数年次にわたる受入農家アンケート調査、および参加者レポートを手掛かりとす
るテキストマイニング手法を援用した分析から、受入農家の目的意識が“受入地域の活性化（内
向き）”から“次世代の担い手育成（外向き）”へと推移したことに加えて、よそ者である学生た
ちとの継続的な交流を積み重ねるなかで、「ネットワーク、信頼、互酬性」に関する指標が高まり、
結果として「結合型 SC」の蓄積（地区周辺農家を交えた学生との交流や意見交換機会の開催）、
「橋渡し型 SC」の蓄積（地域の枠を超えた研修・イベント開催）が実現したことを明らかにし
ている。

さらに、農業体験農園によるコミュニティの変容（第 4 章）においては、都市地域における農
業・農地の存在を取り巻く法制度が変化するもとの、農業が有する公益的役割の現代的意義につ
いて指摘するとともに、練馬区内の農業体験農園経営主に対する悉皆ヒアリング調査、ならびに
農園利用者への全数アンケート調査結果から、①農園経営主の目的意識が“都市住民の農業理解
促進”に留まらず“自らの営農意欲の向上”にまで拡がり、かつ農園サポーター（リピーター利
用者）の存在など利用者との新たな関係性の構築が始まっていること（「橋渡し型 SC」の蓄積）、
②農園利用者に対する農業・食料に対する意識・生活の変化と多様なコミュニティの萌芽（園主会
による情報交流、農園利用者同士の新たな繋がり、利用者の居住地コミュニティへの関わり方
の変化など「結合型・橋渡し型 SC」双方の蓄積）が確認されることを明らかにしている。

終章では、これらの実証的な分析・考察を踏まえて、都市農村交流がコミュニティの変容に果たす役割として、①外部人材との交流によるホスト側の意識変化、②人的繋がりを見つめ直しによる新たなコミュニティの形成や既存コミュニティへの参画動機の創出（「地縁型コミュニティを軸として外部人材を巻き込みつつテーマ型コミュニティ化を図る」）を指摘するとともに、それらの役割が継続的に発揮されるための条件として、①地域（農業・住民・生活）との関わりが深い取り組みに発展させること、②一過性の交流に留まらない反復性の必要を提言している。

以上のことから、本論文はこれまでの観光学研究（グリーンツーリズム論）を深化させる上で重要な知見を提供したことはもちろん、多くの学問領域において現代社会が直面する諸問題解決の糸口として注目される SC 研究の精緻化に少なからぬ貢献を成し得たものと評価できる。

〔最終試験の結果の要旨〕

最終試験においては、副査委員から、論文中でのキーワードとなる「コミュニティ」の概念に関する研究レビューを追記することで、より論文としての完成度が高まるという指摘があったほかは、全体として博士学位論文としての水準を満たす内容を備えているものと評価された。とりわけ、従来の SC 研究では必ずしも充分に行われてこなかった複数のコミュニティ（地縁型とテーマ型）を対象とする二時点間の比較分析を行った点はオリジナリティが高く、評価に値するというコメントが付記された。

以上の指摘事項は、学位論文の論旨を明確化・精緻化する上で最小限の加除修正を施すことにより解決可能な内容であったことから、審査委員会は筆者が修正論文に修正対応表を付して各審査委員の了解を得るという手法により、本論文は博士学位論文としての内容を十分に満たすものであると判断し審査結果を「合格」と確定した。